「キリストからの祝福」④義に飢え渇く人に　　マタイ 5:1～6

１．幸いの意味

主イエスは、山の上で、集まってきた人々に八つの祝福を宣言されました。第一は 「こころの貧しい人たちの祝福」、第二は「悲しんでいる人たちの祝福」、第三は「柔和な人たちの祝福」で、これらについてはすでに学んできました。当時、貧しい人、嘆き悲しむ人が大勢いました。「柔和な」という言葉には、「押しつぶされ、絶望的」という意味もありますので、押しつぶされ、絶望していた人も多かったのです。主イエスはそうした人々に救いを約束し、「さいわい」と「祝福」を告げられましたが、その「さいわい」とは、キリストを信じる者の、内面にかかわる「さいわい」です。

恵み深い神は、わたしたちの信仰と祈りに答えて、わたしたちがかかえている問題を実際的に解決してくださいますが、そうした問題の解決とともに、その問題の解決を祈り求めるわたしたち自身をも恵み、祝福し、強めてくださいます。神は、信じる者を取り囲んでいる状況を変えてくださるだけでなく、信じる者の内面をも変えてくださるのです。イエス・キリストがくださる救いには、苦しみや悲しみ、痛みが取り除かれ、そうしたものから解放されるということだけでなく、苦しみや悲しみ、痛みによって自分自身が変えられていくという面があるのです。

人が抱える問題は、物質的なものと精神的なもの、そして霊的なものとがからみあった複雑なものです。ですから、目に見えるものだけでは、問題は解決されないのです。経済的に貧しかった家庭に急にお金が入ってきて、経済的には豊かになったけれど、そのために家庭にいざこざが起こるようになったといった話はよく聞くことです。「人はパンだけで生きるのではない。」ルカ 4:4 と、聖書にある通りです。

神は、人が苦しんでいる問題をちゃんと見ていてくださいます。そしてそれに働きかけてくださいます。しかし、神の目は、問題の中で苦しみ、解決を祈り求める人自身にもっと向けられています。神は、人を愛しておられ、人が問題から解放されるだけでなく、問題をくぐりぬけることによって、さらに強められ、より神に近づくことができるようにと願い、人の内面に働きかけてくださるのです。

ですから、問題に悩むときは、問題だけに目を向けないで、自分に目を向ける必要があります。問題の解決を祈り求めるとき、自分が変えられることを願い求めるのです。すべての問題が自分のせいで起こっているわけではありません。明らかに自分が被害者として傷つくこともあります。ですからすべてを自分のせいにして自分を責める必要はありません。ただ大切なことは、問題があり、その問題に悩んでいる自分がいるという事実です。そしてこの問題の中で、自分が神とどう向き合うかということです。この霊的、信仰的な問題の解決があってはじめて、本当の解決へと導かれるのです。

２．「義」の意味

きょうは、第四の祝福、「義に飢え渇く者は幸いです。」について学びますが、主は、ここでは実際の飢餓というよりは、霊的、信仰的な飢餓について語っておられます。「飢え渇く」の前に「義に」という言葉が加えられているからです。

ところで、この「義」には、どういう意味があるのでしょうか。まず、考えられるのは「社会正義」です。主イエスの時代のユダヤの人々は、ローマに苦しめられていました。たとえば、マタイ 5:41 に「あなたに一ミリオン行けと強いるような者とは、いっしょに二ミリオン行きなさい。」とありますが、当時、ローマ兵は、ユダヤの人の誰にでも、その場で命令して、ローマ兵のために荷物を担がせることができました。たとえユダヤの人がローマ兵に殺されても文句を言えなかったのです。ですからユダヤの人々に正義に対する激しい飢えかわきがあったのは、たやすく想像できます。

次に「義」には「救い」という意味があります。神は義なるお方で、神はご自分の義をもって、世界を裁かれるお方です。聖書には、「確かに、主は来られる。確かに、地をさばくために来られる。主は、義をもって世界をさばき、その真実をもって国々の民をさばかれる。」詩篇 96:13　ユダヤの人々はこれらの言葉に基づいて、自分たちを圧迫している国を、神が懲らしめ、神の民に救いがおとずれることを期待していました。

しかし、ここにおいては一人一人の罪、不義に対する神の義という意味で使われています。聖書に、「私の咎が、私の頭を越え、重荷のように、私には重すぎるからです。」詩篇 38:4 という告白の言葉があり、「義人はいない、ひとりもいない」ローマ 3:10 とありますがいたるところで神の民が、不義に染まっていると責めています。きよい神の前で、何の罪も不義もない人はだれひとりいないのです。

けれども、聖書には、「御顔を私の罪から隠し、私の咎をことごとく、ぬぐい去ってください。」詩篇 51:9 との祈りがあります。神は、自分の罪と不義を知り、それを悔い改める者の罪を赦し、その不義をきよめて、神の前に正しい者にしてくださるのです。罪ある者、不義な人間が、神の義を着せてもらい、聖なる神の前に正しい者として立つことを許されるのです。新約では、神が着せてくださる「義の衣」は、キリストご自身であると言われています。イエス・キリストはただひとり罪のない神の御子でした。そのお方が全人類の罪を背負い十字架で命をささげられました。それによって信じる者は、キリストの正しさ、「義」を受け取るのです。ガラテヤ 3:27 に「バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。」とあります。神はキリストを通して、信仰者をご覧くださるので、 人は、キリストを着ることによって、「罪びと」としてではなく、「義人」として神の前に出ることができるようになるのです。

三、「飢えかわく」ことの意味

さらに、主イエスが言われる「義」には、義とされた者が、実際に義なる者になっていくということが意味されています。神は、罪ある者をも、キリストのゆえに「義人」という立場を与え、「神の子ども」という身分を与えられました。神は、実際には「不義」な者を「義」としてくださいました。すると義とされたのだから、もう実際に義となる必要がないかというとそうではありません。信じる者を「聖徒」と呼び、「神の子ども」と呼んでくださる神は、信じる者が実際に聖なる者となり、神の子どもらしくなることを願っておられないはずがありません。信じる者は「キリストを着た」のですが、「キリストを着た」といっても、それはコートのように、着たり脱いだりするということではありません。キリストを着た人はキリストにとりこまれ、キリストと一体になるのです。その中身まで、キリストのように変えられていくのです。

神学の言葉では、義と認められることを「義認」と言い、実際に義とされることを「聖化」と言います。そしてクリスチャンの実際の体験の中では、「義」と「聖」とはひとつのもので、切り離すことはできません。ちょうど運転免許証のようなものと言ったら良いでしょうか。運転免許証を持つことによって車を動かす資格、あるいは権利を持ったわけですが実際、車を何度も運転する間に運転技術が向上してゆきます。そのどちらも必要です。信仰者は「義」とされてはじめて聖とされ、「聖」とされることによって「義」とされていることを確信できるのです。義とされること、「義認」はすでに成就していますが、聖とされること、「聖化」は天にたどりつくときまで成長していきます。ですから、信仰者はすでに義とされていても、聖化を追い求める思いが起こってくるのです。それが「義に飢えかわく」ということです。クリスチャンは罪の赦しからくる平安を知り、そこに平安と安らぎを見出します。しかし、同時に自分に

はまだ罪からきよめられていく余地があることを知って、きよめられることを熱心に求めます。

クリスチャンは救われている喜びを知り、キリストの名で呼ばれていることに心満たされ、誇りとさえ思います。しかし、同時に、罪赦された罪人として神の前に出ます。「聖徒」でありながら「罪人」。「罪人」であるのに「聖徒」。今日のみことばで言うなら「飢え渇い」ているのに「満ち足りて」おり、「満ち足りて」いるのに「飢え渇いている」、と言うじつに不思議な存在です。しかし、そこに真実な信仰者の姿があるのです。

星野富弘さんの詩にこのようなものがあります。

痛みを感じるのは　生きているから
悩みがあるのは　生きているから
傷つくのは　　生きているから
私は今かなり生きているぞ

本来なら、痛み、悩み、傷つくことは避けて通りたいものです。しかし、それらの経験を通して今、生きているという自分の存在感を確認できた。そのように星野富弘さんは受け止めたわけです。神からの罪の赦しを深く経験できるのは自らの罪に泣き、罪深さにおののく者、つまり義に飢え渇く者です。自らの罪咎が分からない者には神の赦しは体験できませんし、あまり意味がありません。

食べものや飲み物だけに飢えかわくのでなく、精神的なものに「飢えかわく」ことができるのは人間だけです。また、自分の願いや思いが満たされることに「飢え渇く」のでなく、神の義が、世界に、また、自分のうちに実現するようにと、待ち望み、そのことに「飢え渇く」のは、キリストの義によって救われたクリスチャンだけができることです。日本語で、「義」という漢字は「主義主張」や「義理人情」などといった言葉で使われています。しかし、その「義」は「人の義」で主観的かつ一時的なものです。それは神の国に属する「神の義」ではありません。「神の国とその義とをまず第一に求めなさい」マタイ 6:33 とあるように、自分の主義主張やこの世の義理人情ではなく、「神の義」を求めましょう。そして、神の義を真剣に求めたら必ず「義に飢え渇く」つまり自らの罪深さを知らされ、さらにキリストの十字架によって罪赦され、神が私を聖徒と呼んでくださることに感謝とほんとうの満足を味わいたいと思うのです。私たちはこの世にあっては天国を目指し、赦され続ける罪びとなのです。